

青い血と黒い血

アレクサンドル・デュマのパンテオン葬

竹内 修一

1

2002年11月30日、『三銃士』で知られる作家アレクサンドル・デュマ(1802-1870)の棺がパンテオンに入れられた。シラク大統領にとっては1996年のアンドレ・マルロー以来、二回目のパンテオン葬である。二期十四年を務めた社会党のミッテラン大統領から政権を奪回したシラクにとって、ドゴール大統領時代の文化大臣アンドレ・マルローをパンテオンに入れることは、ドゴール主義者としての自分の系譜を誇示するものであったと言える。だが、百年以上も前に死んだ作家を、21世紀初頭に共和国の神殿に入れることには、どのような意味があったのだろうか。なぜシラク大統領は、またしても作家を、そして他の誰でもなく、アレクサンドル・デュマを選んだのであろうか。

正面のペディメントの下に「偉人たちへ祖国は感謝する」という銘句が刻まれているパンテオンは、言うまでもなく、大革命に由来するフランスの「偉人たち *grands hommes*」の霊廟であり、この建物のクリプトにはヴォルテールとルソーという二人のフィロゾーフをはじめとして、エミール・ゾラ、ジャン・ジョレス、ジャン・ムーラン、コンドルセ、キュリー夫人といった、それぞれの時代に選ばれた偉人たちが眠っている。だが、革命以来、パンテオンの地位は決して安定したものではなかったことを思い起こそう。パンテオンを教会に戻したナポレオンが政府高官や將軍たちといった自分の部下を埋葬して以降、この巨大建造物は長い間使われることはなかった。偉人たちの霊廟としてのパンテオンが真の意味で復活するのは、第三共和政を待たねばならなかった。すなわち、1885年にこの時代もっとも名高い作家であると同時に元老院議員であったヴィクトル・ユゴー(1802-1885)が死したとき、時の政府は「パンテオンは原初の状態に戻される」という政令を出し、この作家のパンテオン葬を挙行了したのである。それは、7月14日が国民の祝日とされ、ラ・マルセイエーズが国歌となる¹、現在にまで至るフランス共和国の

¹ 7月14日が国民の祝日となるのは1880年、ラ・マルセイエーズが国歌とされるのは1879年である。ちなみに明治政府が紀元節を定めるのは1873年である。

象徴が成立する時代であった。こんにちのパンテオンは、革命期というよりは、ユゴーのパンテオン入りを直接の起源とするとよいのである。

ユゴーとデュマは同じ年に生まれており、両者ともにナポレオン配下の将軍を父にもつ。しかし前者がロマン派の領袖としてほとんど 19 世紀を代表する作家・詩人であるのに対し、後者は『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』といった大衆向けの作品を著した作家に過ぎないという評価が一般的であろう。実際、東京大学出版会の『フランス文学史』では、ロマン派とユゴーについては複数の頁が費やされているのに対し、デュマに関してはわずか六行が割かれているに過ぎない。デュマの名が冠された歴史小説の多くは、マケという元高校教師が下書きを書いたあとでデュマが手を入れたものだと言われており、この作家の真性の作品であるとみなすことさえ躊躇されてきた。フランス共和国がデュマのパンテオン葬を実施したことは、文学史上の評価とは異なる価値基準によったものであろう。では、どのような意味に於いて、アレクサンドル・デュマはフランスの「偉人」なのだろうか。

2

革命記念日の記念式典あるいは大統領就任式とは異なり、パンテオンに偉人の棺を移葬するセレモニーは定期的に行われる行事ではないので、決まった式次第があるわけではない。セレモニーの度に、様々な演出がなされてきた。死後すぐに行われたヴィクトル・ユゴーのパンテオン葬や、ゲシュタポに虐殺されたレジスタンスの指導者ジャン・ムーランのパンテオン葬は、明らかに葬式として演出されていたが、革命期のヴォルテールやルソーのときは死を想起させる要素は少なく、むしろ彼等が神格化される勝利の祭典であった。1989 年に行われた、モンジュ、グレゴワール、コンドルセのパンテオン入りも革命二百周年の記念式典としての色彩が強かった。では、デュマのパンテオン葬はどのようなものであったのか。

マルローのときと同様、日が落ちてから行われたデュマのパンテオン入りのセレモニーは、ほとんど仮装行列を思わせるものであった。まず、19 世紀初頭——『モンテ・クリスト伯』の時代——の衣装を身にまとった群衆が、それぞれ何かを叫びながら、スフロ通りを行進してくる。次に、銃士の衣装を着た四人の男たちに、デュマの棺が運ばれてくる。棺には青い布がかけてられており、「一人は皆のために、皆は一人のために」という『三銃士』のスローガンが刺繍してある。そのまわりを馬に乗った銃士たちが囲んでい

る。そのあとに続くのは、『王妃マルゴ』や『王妃の首飾り』の登場人物たちであろうか。騒々しくスフロ通りを行進するなか、所々で集団は止まり、デュマの芝居の一場面を演じる。それまでのどのセレモニーとも似ていない、このような演出を見るとき、パンテオン葬とはやはり近代に〈作られた伝統〉であることを思わざるを得ない。

四人の銃士たちに運ばれてきたデュマの木製の棺はパンテオン広場中央に置かれる。まわりには、大きなデュマの写真が四枚置かれている。そのなかの一枚には、肌の色や頭髪から、黒人の血を引くことがよく分かるこの作家の肖像の後方にドラクロワの《民衆を導く自由の女神》が合成されており、写真下部には、この女神が象徴する共和国のスローガン「自由」が記されている。時代がかった、様々な衣装を着た者たちが松明をもって見守るなか、共和国大統領がパンテオンの前——観衆から見れば棺の向こう側——に設置された演台に歩み寄る。デュマを讃えるシラクの演説はこのように始まる。

アレクサンドル・デュマ！

あなたとともに、パンテオンに入るのは、少年時代、隠れて味わった読書の時間、感情、情熱、冒険、勇敢さです。

あなたのおかげで、わたしたちはダルタニアンになり、モンテ・クリスト伯になり、バルサモになりました。フランスの道々を馬に乗って進み、戦場を駆け巡り、宮廷や要塞を訪問しました。あなたのおかげで、わたしたちは、松明を手にして、薄暗い廊下を、隠された地下道を通りました。あなたのおかげで、私たちは夢を見ました。あなたのおかげで、私たちは今なお夢を見ています²。

このようにシラクが最初に語り出すのは、デュマの作品を読んで胸を踊らせた記憶である。「わたしたち」つまりフランス人たちは、小さいときに、デュマの小説を夢中で読んで、『三銃士』の主人公ダルタニアンや、自分を陥れた者たちへの復讐心に燃えるモンテ・クリスト伯、ルイ 15 世の時代に王制を転覆しようと試みたジョゼフ・バルサモになりきった。そうしたデュマの小説の登場人物とともに、夢見がちに、「松明を手にして」——広場を

² 理由は分からないけれども、シラク大統領の演説集 (*Mon Combat pour la France*, Odile Jacob, 2007) には、マルローのパンテオン葬に於ける演説は収録されているものの、デュマのパンテオン葬のさいの演説は見当たらない。本稿で引用するシラクの演説は、すべて以下に掲載されているものである。(2018年12月1日参照)

http://www.jacqueschirac-asso.fr/archives-elysee.fr/elysee/elysee.fr/francais/interventions/discours_et_declarations/2002/novembre/fi001875.html

取り囲む人々がもつ松明はこの一節に呼応させるためのものであろう —— 「薄暗い廊下」や「隠された地下道」を通して、各地を冒険したのだ。多くの国民が共通してもつであらう、このような若き日の読書体験がまずは強調されるのである。

この演説はデュマを讃えることを目的とするものであるが、大統領は賛辞ばかりを述べるのではない。こんにちデュマの棺をパンテオンに移葬することは、生前のデュマが受けた「不正を正す」ことなのだとシラクは言う。

共和国は本日アレクサンドル・デュマの天才に榮譽を与えることだけに甘んじるわけではありません。共和国は不正を正すのです。奴隷であったデュマの祖先の肌に高温の鉄によって烙印が押されたように、幼少期からデュマに印をつけた不正を。

[…]

混血児の息子であり、青い血と黒い血を引くアレクサンドル・デュマは、幼少期から、もはや旧体制の社会ではありませんでしたが、カーストの社会であり続けていたフランスの社会の視線と対峙せねばなりません。フランスの社会は彼に対してすべてのことを非難するでしょう。当時のカリカチュアが強調して描いた、褐色の顔、縮れた髪の毛、そして驚くほどの浪費癖が非難されました。

アレクサンドル・デュマの父方の祖母は、フランス領サン・ドマング —— 現在のハイチ共和国 —— の黒人奴隷であった。その血を引く『三銃士』の作家は、「褐色の顔」と「縮れた髪の毛」という黒人の特徴を受け継いでいた。そのせいで彼が受けた社会的な差別について、共和国大統領は謝罪する。かつての奴隷制度の犠牲者への謝罪がこのパンテオン葬の隠されたモチーフであることが、ここで明らかになる。

ところで、上の一節で、デュマが「青い血と黒い血 sang mêlé de bleu et de noir」を引いていたことに、シラクが何気なく言及していることに注目しよう。「黒い血」に関しては、ここで黒人の血を引くデュマに対して謝罪する以上、それほど驚くことではあるまい。むしろ「青い血」、すなわち「貴族の血」に言及していることが興味深いように思われる。デュマの父方の祖父アレクサンドル＝アントワーヌ・ダヴィ・ド・ラ・パイユトリー侯爵は、フランス領サン・ドマングでプランテーションを営み、そこで黒人奴隷とのあいだにデュマの父親をもうけた。この貴族は、黒人たちに対する加害者であり、植民地主義の受益者であったと言ってよい。デュマに謝罪するこの一節で、『三銃士』の作者が、黒人奴隷の血のみならず、フランスの特権階級の血を

も引いていることを大統領は想起させるのである。もう少し先でシラクは、オルレアン家と親しく、共和国派にも近く、思想的には保守派でもあり革命派でもあったこの作家に関して、「デュマはフランスを […] その矛盾に於いて体现しているのです」と言うが、この言葉は奴隷と貴族を祖父母にもつ、彼の血筋に関してもあてはまるだろう。

それでは、パンテオンに入るために、アレクサンドル・デュマにはどのような功績があったのか。植民地の黒人奴隷の血を引く者、その容貌によって差別を受けたフランス人たちは決して珍しい存在ではあるまい。なぜデュマなのか。いかなる意味で、『三銃士』の作者は、フランスの「偉人」なのだろうか。シラクは次のように説明する。

同じ時期にバルザックが『人間喜劇』の複雑な仕掛けを通して、同時代のフランスを描いたのに対し、デュマはフランスのドラマを描き、革命による断絶の刻印が色濃く残る国を、過去と和解させました。

数世代に渡って、デュマの作品によって、フランスの歴史が、わたしたちのイマジネールの酵母となるでしょう。デュマの作品がわたしたちの集合的記憶を形作り、私たちの国民的アイデンティティを作るのに貢献するのです。今日でもなお、多くのフランス人がリシュリュー枢機卿の姿を知っているのは、フィリップ・ド・シャンペーニュの絵筆によるものではありません。フランスのことに情熱を燃やす国土を黒や赤のインクで描いたアレクサンドル・デュマの筆によるのです。

「同時代のフランス」を描いた『人間喜劇』の作家を大統領が讃えるにせよ、パンテオンに入る栄誉はバルザックのものではない。「フランスのドラマ」を書いた作家こそが偉人たちの霊廟に眠ることを許されるのである。シラクによれば、アレクサンドル・デュマの功績は、『三銃士』をはじめとする王国の時代を舞台とする作品を書くことによって、革命によって混乱したフランス人たちを「過去と和解」させたことにあるのだ。デュマの芝居を見、デュマの歴史小説を読むことによって、フランス人たちは過去のフランスを、自分たちの祖先の姿を、生き生きと想像した。デュマの作品は、「わたしたち」フランス人の「集合的記憶」を形成し、共通の過去をもつはずのフランス国民がみずからのアイデンティティを確立することに貢献したのだ。これが、他の誰でもなく、デュマが「偉人」に選ばれた理由なのだ。

デュマの功績を称えたあと、演説の終盤で、シラク大統領は、「偉人」の棺のまわりを取り囲む、このセレモニーの登場人物たち——それはデュマが命を吹き込んだ彼の小説の登場人物たちである——を数えあげる。

本日、アレクサンドル・デュマはもう孤独ではありません。色とりどりの、騒々しい、喧噪に満ちた行列が彼に従っています。デュマとともに、パンテオンに入るのは、わたしたち人民の記憶であり、わたしたちの集合的イマジネールなのです。ドイツ人歩兵、矛槍兵、灰色銃士隊と黒色銃士隊、寵臣と宮廷人、宿屋の主人とフランスの大貴族、サン・キュロットと愛妾、従僕と枢機卿、フランス王妃と衣類整理係の女、そうした実に二千五百人も登場人物がアトス、ポントス、アラミスとダルタニアンのみまわりに集まって、かつて彼等に命を与えた、もしくは命をふたたび吹き込んだ、偉人の亡骸を護衛しています。

デュマが作り出した二千五百人も登場人物たちは、「わたしたちの集合的イマジネール *notre imaginaire collectif*³」に刻まれている。デュマの作品を読むことによって、フランス人が想像する自分たちの過去、「わたしたち人民の記憶」もまた、デュマとともにパンテオンに入るのである⁴。様々な衣装を着たデュマの作品の登場人物たちにスフロ通りを行進させた、この日のセレモニーの演出が、上の一節と呼応させるためのものであることは明瞭だろう。

ところで、上で「わたしたち人民の記憶 *notre mémoire populaire*」と訳した箇所形容詞「*populaire*」は、「人民の」ではなく「民衆の」とすべきであるかもしれない。デュマの歴史小説を読んで心躍らせたのは「人民」というよりはむしろ「民衆」であろうからだ。しかし、やはりここで問題になるのは、ジャック・シラクを大統領に選んだフランス「人民」であるように思う。上の一節でシラクが数え上げるデュマの登場人物は、「民衆」という語が想起させることはないフランス社会の上層階級も含んでいる。「宮廷人」、「枢機卿」、「王妃」という特権階級に属する人々も、革命を推進した「サン・キュロット」も同様に、アレクサンドル・デュマのおかげで作られた「集合

³ 言うまでもなく、「イマジネール *l'imaginaire*」は、想像された世界を示す、フランス語に特徴的な語である。英語にはこの語に直接対応する単語はない。ちなみに、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体 *Imagined Communities*』という著名なナショナリズム研究がフランス語に訳されるさいには『国民のイマジネール *L'Imaginaire national*』というタイトルが採用されている。

⁴ 「デュマとともに、パンテオンに入るのは、わたしたち人民の記憶であり、わたしたちの集合的イマジネールなのです。」という箇所は、アンドレ・マルローによるジャン・ムーランの追悼演説の以下のような一節を参照しているように思われる。「ここに入れ、ジャン・ムーランよ、おまえの恐ろしき葬列とともに […]。」マルローは、ムーランとともにドイツによる祖国占領という暗い時代を生きたフランス人たちの記憶がパンテオンに入ることを強調していた。以下の拙論を参照のこと。「アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」—— 第五共和国のコメモラシオン」、『北海道大学文学研究科紀要』第155号、2018年7月、55-80頁。

的イマジネール」のうちに、いまや共和国の主権者となった「人民 *peuple*」の「集合的記憶」のうちに住み着いているのである⁵。

デュマが創造した小説の登場人物を数え上げたあと、上の一節に引き続いて、共和国のスローガン「自由、平等、友愛」に言及しつつ、シラクの演説は次のように終わる。

パンテオンのブロンズの戸が閉じられるとき、アレクサンドル・デュマはヴィクトル・ユゴーとエミール・ゾラの横に自分の場所を見出すことになるでしょう。ユゴーとゾラは、デュマの文学上の兄弟であり、社会参加における兄弟であり、激しくまた才能をもって、自由、平等、友愛を守り、筆によって共和国の歴史に足跡を残し、共和国の歴史を作った兄弟なのです。

共和国にも銃士たちがいるのです。

シラクは、すでにパンテオンに入っているふたりの作家、つまりユゴーとゾラの名前が呼び起こし、「共和国の歴史」を作った作家たちの系譜にデュマを位置づける。デュマの同時代人であり、フランスの国民作家ユゴーの名をあげることはさして驚くことではないだろう。デュマは同い年の「兄弟」であるユゴーと同じ部屋で眠ることになる。他方で、もうひとりの作家ゾラの名前に、保守派の大統領が言及していることは興味深く思われる。1908年に行われたゾラのパンテオン葬に於いて、臨席していたドレフュスに対する発砲事件が起こったことが端的に示すように、ゾラはドレフュス派と反ドレフュス派に分裂した所謂「二つのフランス」の象徴であったのである。しかし、ほぼ一世紀のち、保守派の大統領がゾラの名前に言及したとしても、国民のあいだに如何なる反発も惹起しない。フランス人同士を対立させたドレフュス事件は、「共和国の歴史」の一場面となったのである。こんにちのフランス社会に於いて問題なのは、ドレフュス派と反ドレフュス派の対立ではない。そうではなくて、植民地出身者と白人とのあいだの亀裂である。デュマをユゴーとゾラと同じくフランスの「偉人」と認めることは、国内で不満を募らせる黒人奴隷の子孫に対する、融和の呼びかけである、と考えることができるだろう。

⁵ 1996年に実施された、マルローのパンテオン葬のさいの演説では、シラク大統領は「国民 *nation*」という語を効果的に三度使用しているのに対し、デュマを讃える演説では一度も使っていない。前者に於いて大統領は、ある意味でフランス国民のナショナリズムに訴えたのに対し、後者ではむしろ普遍的な共和主義を利用したと言える。

一見内容が矛盾するように思える、最後の文「共和国にも銃士たちがいるのです」は、このデュマのパンテオン入りによって、大統領が何を実現しようとするのかを象徴的にあらわしている。アトス、ポントス、アラミスという三銃士に代表されるような「銃士 *mousquetaire*」というのは、「マスケット銃 *mousquet*」を装備していた軍人のことである。彼等が活躍したのは、17世紀から18世紀にかけて、つまりブルボン王朝の時代であった。共和国には憲兵はいるかもしれないけれども、銃士はいない。それでも敢えて「共和国にも銃士たちがいるのです」と言うことによって、シラク大統領は、共和国と王政の時代の断絶を和解させようとしているのだ。より正確に言えば、「自由、平等、友愛」というスローガンが象徴する共和国の記憶に、銃士たちが王妃を守っていた王国の時代の記憶を接続しようとしているのである。

3

『記憶の統治 *Gouverner les mémoires*⁶』と題された書物に於いて、ジョアン・ミッシェルは、「記憶レジーム」という用語を使用してフランス人たちの集合的記憶の推移を説明している。彼の議論を参照しつつ、死後130年を経て、2002年に、フランス共和国がアレクサンドル・デュマをパンテオンに移葬したことの歴史的意味を考えてみよう。

ミッシェルによれば、フランスは伝統的に「国民統一を目指す記憶レジーム *Régime mémoriel de l'unité nationale*」であった。王国の時代には、神権をもつ国王の系譜が正統なものとして国民に教えられていた。共和国は当然王国の正統性を否定し、その起源を革命に求めた。第三共和国がひとびとに記憶するよう求めたのは、7月14日であり、人権宣言であり、ラ・マルセイエーズであった。やがて政体として安定するようになると、共和国は、王国の記憶を否定するのではなく、共和国の公式の記憶にそれを回収してゆく。

国家が国民の集合的記憶の管理をほぼ独占する、このような「国民統一を目指す記憶レジーム」に於いて顕彰されたのは、「祖国のために[*pour la patrie*] 死んだ者たち」である。各地に作られた「フランスのために死んだ者たち」の碑文⁷、あるいは凱旋門の下の「無名戦士の墓」は、そうした「祖国のために死んだ者たち」を国民が絶えず想起するために設置されたのである。

⁶ Johann Michel, *Gouverner les mémoires : les politiques mémorielles en France*, PUF, 2010.

⁷ パンテオン内部にも、第一次世界大戦で死んだ作家たちの名前が記された碑文が設置されている。

ミッシェルよれば、1990年代から「国民統一を目指す記憶レジーム」に対抗する、新たな「記憶レジーム」があらわれてきた。それが「犠牲者の記憶レジーム Régime victimo-mémoriel」である。すなわち、この時代には、「国のために死んだ者たち」ではなく、「国家のせいで [à cause de l'État] 死んだ者たちや犠牲になった者たち」の記憶が社会の表層にあらわれるようになってきた。ユダヤ人たち、黒人奴隷の子孫たち、アルキと呼ばれるアルジェリア戦争のさいにフランス側で戦ったアルジェリア人兵士たち——彼等がフランス国家のせいで苦しんだ自分たちの記憶を認定してくれるよう社会に訴えはじめたのである。このような時代になると、国家は国民の記憶の管理をもはや独占することができなくなる⁸。

ミッシェルの議論をふまえつつ、第五共和国に於けるパンテオンの歴史を振り返ってみれば、1964年にドゴール大統領によって実施されたジャン・ムーランの移葬は、典型的な「祖国のために死んだ者」の顕彰であったと言える⁹。アルジェリア戦争（1954-1962）という一種の「兄弟殺し」によって混乱したフランス人たちに、近い過去でなく、祖国がドイツに占領されていた暗い時代に、ゲシュタポによって虐殺されたレジスタンスの指導者を思い起こさせることによって、分断されたフランス人たちの「統一」を取り戻そうとしたのである。

それに対して、ドゴール派の大統領シラクが2002年に行ったデュマのパンテオン葬は、国家のせいで被害を受けた者たちやその子孫に対する、国家の側からの応答であると言える。黒人奴隷の孫に謝罪し、共和国の神殿に彼の棺を入れることによって、黒人の血を引く者もまた、フランスの偉人になることができるのだと示したのである。そしてシラクは、デュマの数々の歴史小説によって形成された、自分たちの過去に関する「わたしたちの集会的イマジネール」を讃えた。そうすることによって、フランス共和国はかつての王国時代の記憶と植民地主義の記憶を、それが矛盾に満ちたものであれ、「わたしたち人民の記憶」のうちに回収しようとしたのだ。それが、21世紀初頭に、アレクサンドル・デュマをパンテオンに移葬した政治的な行為の意

⁸ ミッシェルが描くこのような歴史の見取り図は、おそらく日本に関してもあてはまる。かつての植民地出身の、従軍慰安婦たち、強制連行された者たち、あるいは北海道の原住民であるアイヌの人たちといった、国家によって苦しめられた人々が、彼等の記憶を認めてくれるように訴えはじめたのは、そうした訴えが社会の前面にあらわれてきたのは、やはり1990年代以降であろう。

⁹ 前掲拙論「アンドレ・マルロー「ジャン・ムーランの遺灰のパンテオンへの移葬」——第五共和国のコメモラシオン」を参照のこと。

味であろう。シラクの言葉を使うならば、このパンテオン葬によって、「青い血と黒い血」を共和国に混入したうえで、フランス国民の統合を達成しようとしたのである¹⁰。

¹⁰ フランス領サン・ドマングの黒人奴隷の孫をパンテオンに入れた後、大統領の任期が終わろうとしていた 2007 年に、シラク大統領はパンテオン内部に於いて「フランスの正義の人々」のためのセレモニーを行った。第二次大戦中に、ユダヤ人迫害が猛威を振るうなか、ユダヤ人たちを救ったフランス人たちを称えたのである。シラクに続いたサルコジ大統領は、2010 年 1 月に、アルベール・カミュのパンテオン葬を行う意志を表明したが、世論の反発を生み、結局はカミュの遺族の同意を得ることができず、移葬は実現しなかった。その後サルコジ大統領は、正式なパンテオン葬を実施することはなかったものの、このモニュメントに於いて、黒人詩人エメ・セゼールを称えるセレモニーを行った。詩人の業績を称える文字が、パンテオンの内部には刻まれている。アレクサンドル・デュマとエメ・セゼールというふたりの作家のことを思うとき、カミュをパンテオンに移葬しようとしたサルコジ大統領の意向は、ノーベル賞作家の業績を称えるというよりは、むしろアルジェリア出身の「偉人」を作り出し、彼を共和国の公式の記憶に刻むことであったと思われる。